

第一章 魔女の笑窪

みずえの声が受話器から聞こえたとき、私はまた亭主の浮気騒動かと思った。みずえは今年二十九だが、傍目には二十四、五にしか見えない。今の亭主は三人目で、みずえよりふたつ下だ。

みずえはどうしようもないやきもち焼きで、亭主の浮気がわかると、すぐに死ぬの別れるのと大騒ぎを起こす。そのくせ、風俗の仕事をあがれずにいる。「誰からも必要とされたい病」なのだ。男の体は嘘をつけない。たとえ金を払い、しかも心の奥では気に入らないと思っている相手であっても、射精すものを射精すという行為に嘘はない。みずえは、それにはまっている。射精させてやることで、その瞬間、相手に必要とされると感じるので。同じ仕事をしていたことがあるから私にもわかる。

鼻声や言葉責めに反応してしまふ男の下半身は、上半身の地位だけの権力だのとは無関係にかわいい。馬鹿ばかりの話だが、子供の頃、あまり大事にされたことのない女が風俗に入ると、そんな妙な喜びから抜けられなくなる。

「なあに、また亭主が女をこしらえたの？」

私は受話器を肩と耳のあいだにはさみ、ペディキュアを塗ろうと苦労しながらいった。きのう拾った男は、足の爪に歯をたてる妙な癖があった。けつこういい仕事はしてくれたのだが、私がやりたくて拾ったのだということに最後まで気がつかない阿呆だった。

男が射精したとき女をナンパするように、女もやりたいときがある。つまりは道具でしかないのだ。なにに道具以上だと自分を錯覚する。ただの自惚れだ。

夜明け前に、スタンガンで威してホテルから追いだした。

「ちがうわよ。何してんの、ごそごそ音がするけど」

みずえがいった。

「ペディキュア塗ってんの。きのうの男に全部食われちゃったから」

「飛ぶの？ ペディキュアって」

みずえの声に弾みがついた。私はため息をついた。

「あんたもういい加減やめたんでしょ」

「ときどきやりたくなるよ。馬鹿だとは思っけど」

「脳味噌が縮むらしいよ。医者の話だと」

みずえの前歯はすべて差し歯だ。十代のときトルエンをやりすぎて溶けてしまったからだ。

「おっかねえ。やめよ」

「で、何？」

「きのう午後イチでついた客なんだけど」

「また芸能人かい」

ようやく塗り終わり、私は両足の爪先を立てたまま煙草をひきよせた。

『ケライマース』って知ってる?』

「知らん」

「もう、どうしてそうテレビとか見ないの」

「生きてくのに必要ない」

「そういう問題じゃないよ。けつこう売れてる双子の漫才師。見たことない? そっくりでさ、二人とも。無表情でポケと突っこみやる奴」

「ぜんぜん」

みずえはため息をついた。去年の秋だかにも、若いアイドル系のタレントについたとかいって、電話をしてきたことがある。早いが、モノはいいとかで、その後地下鉄のポスターで、その兄ちゃん顔は拝んだ。私にはイモくさいただのガキにしか見えなかった。

「で、何なの」

どうせみずえは退屈して電話をしてきたのだ。みずえの店は、客からのコールが入ると、携帯かポケベルで女の子を呼びだす。女の子は店には入らず、直接ラブホテルへと向かう。店へのバツクは一日のラストで精算するシステムだ。店が暇だと、時間をもて余して電話に手がのびる。

「鉄味^{てつあじ}だったの」

煙草に近づけたライターの手が止まった。

「忘れたの? 鉄味^{てつあじ}ってさ、例の——」

「覚えてるよ」

私はみずえの言葉をさえぎった。

「だから何」

「だから何って……。だって、鉄味だよ」

「そいつがあんたに何かしたのかい」

「しないよ。だってそうだったじゃん。あのときだって」

みずえが思いださそうとでもするようにつづけたので、

「わかってるって」

私は荒々しくいい、煙草に火をつけた。

「室岡のことだろ」

「室岡って……。よく名前、覚えてるね」

「あんな騒ぎ起こしたんだ、忘れないよ」

初めはつまらないきつかけだった。イラン人のボーイがビールをこぼしたか何か。

いいよ、いいよ、と笑っていた。暗い店の中で、青白い顔にさらに白い歯が浮かびあがった。

相手の名は確かさつきと聞いた。室岡につくのも初めてではなかったらう。室岡も気にいって指名していた子だ。

それが突然、切れた。

前のシートで別の客を相手していた私が、悲鳴と怒鳴り声に気づいてふりかえると、室岡がさつきの髪をつかみ、テーブルの角に顔を滅多打ちにしていた。ズボンと下着を膝の下にずりさげたまま仁王立ちになつて。

あわてて止めに入ったボーイもてんで歯がたたなかつた。逆につきとばされ、別の客と女の子ごとひっくりかえつた。さつきは見えていられない状態だった。歯が折れ、鼻が曲がつて口の中は血で溢れている。それでも室岡はさつきの顔をテーブルに叩きつけつづけていた。血沫^{ちりほ}きが室岡

のむきだしの下腹部に飛び散って、室岡まで怪我をしているように見えた。

さつきはもう声もたてられなかった。まるで壊れた人形のようにテーブルに打ちつけられつつけている。

死ぬぞ、と誰かがいったので、私は我に返った。ほとんど手をつけていないビール壘がテーブルにあった。逆手に握り、室岡の後頭部に叩きつけた。

がつんという鈍い手応えは手が覚えている。逆きの壘からまっ白い泡が吹きだした。ビール壘は映画のようには砕けなかった。

室岡がゆっくり前のめりに倒れたあと、まっふたつにぼきりと折れただけだ。

さつきは全治三カ月の大怪我で、顔の大半を整形手術する羽目になった。

警察がきて、室岡が組関係の人間だということがわかった。武闘派の、そのまた一番尖った殺し屋みたいな仕事をしていたらしい。

刑事は、私に気をつけるといった。室岡の仲間が仕返しにくるかもしれないと。

三日後、その仲間が店にきた。室岡とちがつて、ひと目でやくざとわかる大男だった。だが私に仕返しにきたのではなかった。

大男の話では、室岡は、一年に一度か二度ああして切れることがあるのだという。原因は、周りにもわからないほどきさいなことらしい。以前にもかわいがっていた若い衆を、ゴルフクラブで殴りつけ半殺しにしていた。

——迷惑かけたな、姐さん

大男はそういつて、私に頭を下げた。

——怪我させた子には、治療代きっちり払わせてもらおうから

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。